

朝夕は、少ししのぎやすさを感じるようになってきましたが、昼間はまだまだ「危険な暑さ」が続いています。

現在会員登録数 4,288 人さま。次号は 9 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■
【1】お知らせ

● 「おはなしモノレール」参加者募集

貸切の大阪モノレール車内で「おはなし会」を楽しみ、彩都の会場で「人形劇」を観ていただく、人気のイベントです。今回で 15 回目の開催です。

5 歳から小学 3 年生までのお子様と保護者、あわせて 240 人を募集します。

開催日：9 月 21 日（土） 参加費：ひとり 500 円（大人・子ども同額）

申し込み締切：9 月 2 日（月） *申し込み多数の場合は抽選します。

※詳細・申し込みは ↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/01_kids/index.html#ohanashimonorail

● オンライン講座「2023 年に出版された子どもの本から」配信中

2023 年に出版された新しい子どもの本約 300 冊をテーマやジャンル、年齢別に紹介し、現在の子どもの本の傾向について考えます。

配信期間：配信中～12 月 16 日（月） 視聴料：1000 円

講師：土居安子（当財団理事・総括専門員）

※詳細・申し込みは → <https://2023kodomonohon.peatix.com/>

● 「第 41 回 日産 童話と絵本のグランプリ」作品募集

アマチュア作家対象の創作童話と絵本のコンテスト。子どもを対象とした未発表の創作童話、創作絵本を募集します。締め切りは 10 月 31 日（木）です。

詳細は↓↓

http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html#41boshu

● «ご寄付をお願いします» 当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

● YouTube 版「本の海大冒険」 <https://www.youtube.com/@iicloll196>

※公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

- Instagram https://www.instagram.com/iiclo_official/ 随時更新
- X (旧 Twitter) https://twitter.com/IICLO_News 毎日更新

■ ----- ■
【2】コラム
■ ----- ■

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Aya's Talk

『命をつないだ路面電車』 テア・ランノ/著 関口英子、山下愛純/訳 カシ
ワイ/挿し絵 小学館 2024年7月 対象年齢：小学校高学年以上

* 今回のゲストはイタリア語の翻訳家のよしとみあや（A）さんです。

* 作品の結末まで書いています。

あらすじ：1943年、イタリア、ローマのゲットーに住む12歳の少年エマヌエーレは、母親とともにナチスのトラックに乗せられたが、母親がエマヌエーレをトラックの荷台からつきおとし、エマヌエーレは逃げる。そして、2日半、路面電車に乗り続け、車掌さんや運転手さんに助けられる。それから母以外の家族と再会し、家族のために古着やみやげものの商売をして働き、母を待ち続けるが、ローマが解放されても、母は戻ってこなかった。作者が体験した人を取材して書いた作品。

Y：イタリアでの戦争体験を元にした作品です。

A：この作品もそうですが、最近日本で翻訳される戦争児童文学作品は、強制収容所を体験した人物以外の体験の物語が出版されており、多様な視点で戦争が考えられるようになってきていると思います。

Y：この作品では、最後にお母さんはガス室で死を迎えたことがわかりますが、それ以外の家族は生き残ります。その生き残りにあたっては、多くの偶然が重なっています。

A：その中でも特に印象に残るのは、路面電車の車掌さんと運転手さんです。寒さをしのぐマフラー、車庫の中の電車内で寝るための毛布、食べ物など、エマヌエーレが2日半の間路面電車で過ごすのを支援してくれます。とても心あたまるエピソードだと思いました。

Y：ドイツ兵の中にもエマヌエーレにたくさんのお金をくれて助けてくれる人がいます。一方で、ユダヤ人の中にも同胞を裏切る人も書かれています。ここからは、ドイツ人でもイタリア人でも親切な人もいれば、ひどい人もいることがわかり、戦争こそが理不尽に人の命を奪っていくことが伝わります。

イタリアの作品として印象に残ったことはありますか。

A：かなり踏み込んだイタリアの歴史が書かれている点が興味深かったです。というのも、この時期、イタリアの政治状況は複雑で、1943年9月に連合国と休戦協定を結んだことによって、ドイツが敵となっはいるものの、ファシストたちはドイツ寄り、それに抵抗する人たちもいました。

Y：私もその点に興味を持ちました。戦争を知らないイタリアの子どもたちに、当時の政治状況を知らせるという意図があるのかなと思いました。

A：エマヌエーレが路面電車での生活を経験したあとに、それまでは政治にまったく興味がない子どもだったのが、「生活には政治が大きくかかわっていて、政治が理解できれば、日々の生活のこともいろいろ理解できるのだとわかってきた。」と書かれています。これは、この作品が伝えたかったことの一つではないかと思います。

また、食べ物など具体的な描写から、ユダヤ人たちがいかに貧しかったかがイメージできるように描いている点も心に残りました。

Y：私が印象に残ったことは、路面電車の車掌さんの「小さなことでもいい。ひとりひとりが自分にできることをすべきなんだ」ということば、エマヌエーレが小さいときに、はじめてもらった1リラ硬貨を鍵穴に入れてしまって取り出せなくなっていたのが、年取ってから錠前を修理したときに見つかり、子どものころの光景がよみがえったこと、そしてそのことが、亡くなったお母さんの記憶と関連づけられていること、エマヌエーレが作者に「悲劇として書かないでほしい」「わたしは、いつだって人生のいい面を見るようにしてきた」（「著者あとがき」より）と言ったことです。

A：私は、91歳のエマヌエーレの前書き「わたしには「子ども」でいられた時期はありませんでした。」という言葉が作品全体をまとめたことばのように思いました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第108回「マリヴロンと少女」

テキストの二重写し

前回取り上げられた「めくらぶどうと虹」（当メルマガ N0.167）の原稿に赤インクで手を入れた作品です。書き出しの「城あとのおおぼこの実は結び、」から「その城あとのまん中の、小さな四っ角山の上に、めくらぶどうのやぶがあってその実がすっかり熟している。」までの数行は、「めくらぶどうと虹」とほぼ同じ文章です。「マリヴロンと少女」という別の作品なのに、「めくらぶどうと虹」が透けて見えて、テキストが二重写しになる感じをうけます。

ただ、文章は、敬体から常体にかわっています。「めくらぶどうと虹」では、「上のやぶには、めくらぶどうの実が、虹のように熟れていました。」というふうに書かれていました。佐藤泰正は、「地の文の示す童話的文体のリズムを排し、（中略）ただ登場人物両者の対話の孕む主眼に、読者の眼を向けさせようとしている」と述べています（佐藤「宮沢賢治——その改稿の問いかけるもの」2001年）。

その登場人物ですが、改稿された作品に新しく出てくるのが、今夜、市庁のホールでうたう声楽家のマリヴロン女史と、女史をうやまう少女ギルダです。ギルダは、「マリヴロン先生。どうか、わたくしの尊敬をお受けくださいませ。わたくしはあすアフリカへ行く牧師の娘でございます。」といます。マリヴロンとギルダの関係は、虹とめくらぶどうのそれに重なり、やりとりの会話も生かされています。

しかし、二つの関係は、同じでないことにも気がつきます。虹とめくらぶどうの会話はずいぶん親身なものですが、マリヴロンをしたう少女の「先生。私をつれて行って下さい。どうか私を教えてください。」ということばに、マリヴロンは、「かすかにわらったようにも見え」、「当惑してかしらをふったようにも見え」るのです。

「二人の間には、真の意味での対話がないのである。（中略）芸術への覚醒は、少女ギルダには訪れず、ただ行き場のない憧ればかりが残る。」というのは奥山文幸です（奥山「マリヴロンと少女」2003年）。奥山は、恩田逸夫の「マリヴロン＝芸術、少女＝賢治であり、彼の芸術観が主題となっている」（恩田「宮沢賢治の文学における「まこと」の意義」1955年）という指摘をふまえて、「ありうべき芸術観を述べただけではなく、それとの齟齬をも生み出している賢治の実行の苦悩が、少女とマリヴロンとのすれ違いのなかに読みとれる作品でもある。」ともします。前回、「めくらぶどうと虹」のめくらぶどうに見

出された賢治の苦悩がもう一つ深いところで描かれているといえるのかも
れません。(馬車別当)

(本文の引用は、新潮文庫版『新編 銀河鉄道の夜』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のこぼ 62

さようなら、ぼくの王国。マーガトロイドさんが王様で、ぼくが王子だった王
国。その国で、王子のままいるのは、なんとらくだったか。ありのままの自分
でいればいい。かけまわり、笑い、質問し、ヤギやメンドリの世話なんかの手
伝いをし……何をしてもらったのしかった。ハリーは、マーガトロイドさんが何
をしてほしいのか、いつもちゃんとわかっていた。

(『海辺の王国』ロバート・ウェストール/作 坂崎麻子/訳 徳間書店 1994
年6月 p.240)

第二次世界大戦中のイギリス。空襲で防空壕へ逃げたハリーは、両親と妹が
防空壕にたどりつかず、家は破壊されたため、孤児になったと思います。そし
て、6人も子どものいるおばさんの家に行くのは嫌だと思って逃げ出します。
途中でドンという犬に出会い、イギリス北部の海辺を旅します。銀行で貯金
を下ろして食べ物を買ったり、干し草部屋で寝て農家の人に追いかけられたり
、ホームレスのおじさんから海辺での過ごし方を教えてもらったり、兵隊
たちの使い走りをしていて伍長に襲われそうになったり、何度も命にかかわ
る危険をくぐりぬけながらも旅を続けます。そして、息子を戦争で亡くした
一人暮らしのマーガトロイドさんに救われ、マーガトロイドさんと仲良く暮
らし始めます。

ところが、マーガトロイドさんは、ハリーといっしょに住むにあたって、きち
んと手続きをするべきだと言い、二人は、ハリーが元住んでいたところへ出
かけることになります。そのときの、ハリーの気持ちが引用になっています。
これまでの旅から一人で生きることを学び、大人の世界のありようを知った
ハリーは、地元に戻ることは子ども時代の完全な終わりと同義だと思いま
す。そして、ハリーが思ったように、ハリーには厳しい現実が待っていました。

ハリーとマーガトロイドさんとの交流は、18歳の息子を亡くした著者ウェ
ストールが抱く父と子のあたたかい世界を描いているようです。作品全体から、
戦争の理不尽さとともに、子どもにとっての幸せとは何かを考えさせられま
す。(Y)

《4》行って来ました！

姫路文学館で9月1日まで開催されている特別展「画業50年のあゆみ 黒井
健 絵本原画展」に行ってきました。イラストレーター時代に手がけた貴重な
カット作品から、初めての絵本画家作品『あめってあめ』(矢崎節夫・作)、転
機となった『ごんぎつね』(新美南吉)、「ころわんシリーズ」(間所ひさこ)な
ど、約200点の原画を展示されています。どの絵も美しく、ファンタジーの
世界に誘われるような気持ちになりました。

それぞれの作品のキャプションには、文を書いた人や出版社のみでなく、編
集者名、デザイナー名まで書かれている点に絵本はいろいろな人が集まって
作られているという黒井さんのこだわりを感じました。また、多くの作品に
黒井さんご自身の作品に対する思いがつつられ、見る楽しみと読む楽しみ

両方が味わえました。

特に心に残った作品は、『ごんぎつね』と『水仙月の四日』(宮沢賢治)でした。『ごんぎつね』の兵十の母親の葬列をごんが見る場面には、彼岸花が咲いていますが、その花が毒々しくないやさしい赤であることで、兵十の悲しみや、ごんの兵十への共感が読み取れると思いました。『水仙月の四日』は、コンピュータグラフィックを駆使した雪童子のこの世の者でない美しさが心に残りました。

原画のみでなく、黒井作品に登場するネコのバーテンダーの木彫りがあったり、絵本のダミー本があったりして、黒井ワールドの奥深さを感じました。また、インタビュー映像も放映されており、誰かの作品に絵を描くことを「読書感想絵」と表現されていたのが興味深かったです。

文学館からは姫路城の見えるスポットがあり、お城の前にはころわんのパネルがありました。記念撮影をして満足いっぱいでした。(K)

姫路文学館 <http://www.himejibungakukan.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第13回

第4章 宮川ひろ

その3 『「へてか へねかめ」おふろでね』(前半)

これまでの三つの章では、坪田譲治先生、前川康男先生、今西祐行先生、あまんきみこさんのことを書きました。この先生がたと母宮川ひろのかかわりを軸に書きましたから、もう、すでに、母のデビュー作『るすばん先生』(ポプラ社1969年)のころまでを述べています。

第4章では、宮川ひろ(1923~2018年)のデビュー以降のさまざまを作品に即して振り返ります。母もまた、私の出会った児童文学者にほかなりませんでした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

前回の配信時に下記の誤りがありました。おわびして訂正いたします。

データは、すでに修正してあります。

・4ページ21行め

(誤) 2020年(令和2)年2月20日

→(正) 2021年(令和3)年2月20日

・同23行め

(誤) 授与式 →(正) 顕彰式

・同見出し

(誤) 「異化」とは何か—2020年2月、沼田市での講演より—

→(正) 「異化」とは何か—2021年2月、沼田市での講演より—

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

● オンライン講座「宮沢賢治で卒論・修論書いてみる？」

日時：10月6日（日）13：00～16：20 ※無料、要申し込み
対象：宮沢賢治で卒論・修論を書こうとしている大学生・大学院生
規模：講師8人（宮沢賢治研究者）参加者20～25人程度
主催：宮沢賢治学会イーハトーブセンター

● 小展示「チェコの絵本展」

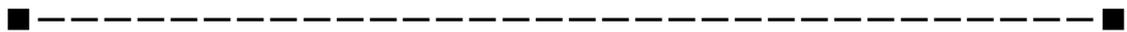
国際児童文学館が所蔵するチェコの絵本約60点を紹介した資料展示です。
会期：開催中～9月11日（水）月曜休館
時間：9：00～17：00 ※入場無料
主催・会場：大阪府立中央図書館 国際児童文学館
*当財団では、2020年度国際交流事業として、チェコ語翻訳者の木村有子さんによる講演会「チェコの子どもの本 いま・むかし」を開催し、報告集を発行しています（880円）。

http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/05_publication/index.html#hanbai

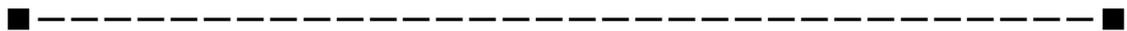
上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／



【4】プレゼント



今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『命をつないだ路面電車』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ(5)このメルマガのご感想をお書きのうえ 応募ください。

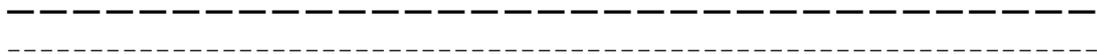
応募フォーム⇒ <https://forms.gle/lGzdaWoDzE4pc7ku8>

締切は9月10日（火）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |



来週からパリ・パラリンピックが始まります。私の地元には、陸上競技選手団として選出され、フルマラソンに参加する選手がおられます。国境を超え、バリアを超えて人々がスポーツを楽しむ様子を観戦するのを楽しみにしています。(TA)



みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。



発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp

